

# 網走ほんりゅう組

第438号  
網走教職員組合  
〒090-0052  
北海道北見市北進町4丁目5-31  
TEL0157(31)7551  
FAX 0157(31)7559  
ab-ky@forest.ocn.ne.jp  
10月25日

## 第33回 網走教組中央委員会 学校は子どもたちの育ちの場・子どもたちのための教育を

第三十三回網走教組中央委員会が一月一日(土)にオホーツク木のプラザで行われました。委任状は二通が届けられ、参加者は一〇名でした。遠軽・紋別支部の若狭議長のもと、討議の柱に沿って話し合いが進められました。

今回の中央委員会では、学テやチャレンジテスト、学校のスタンダード化に関わっての討議が多く行われました。学力テストに関わって、道教組を通して新聞社から取材を受け、「過去問をやるやらないで学校の中でよくしゃくしている学校もあるのでは」「管理職も仕方なくやっている」「教科へのしわ寄せ」などを話したということで、話していけないと道民にも伝わらないのではないかという意見が出ました。チャレンジテストは縛られてしまうのは困るが、数学など低学力の子にはやりやすい問題になつていて、活用することもできるという意見も出ました。また、チャレンジテストについては、初めは「置くだけ」だったのが、「配る」「提出」「教育課程への位置づけ」と茹でガエルのように、少しずつ変化し、振り返ると大きな変化になつてきているという状況も語られました。道教委が全国学テで全国平均以上を目指すために、過去問題やチャレンジテストを強制的に取り組ませることで弊害が出たり、教師もそれに追われることで子どもたちが自分で考えて答えを導き出すという本来の教育がしづらくなつてきているのが現状です。子どもに何を教えたいのか学校の先生たちがきちんと話し合つて学校を作つていかななくてはなりません。

また、教師も今まで子どもたちの実態にに応じてやってきたことを教科書に載っているからと、何が子どもにとつていいのかわからないという視点が抜け、周りから追求されなければならない教師が増えているということも出されました。「筆箱を机上に置かない」「清掃のスポンジを置く場所を統一」など、現にスタンダード化が行われている学校や提案されている学校があります。発達障害などではユニバーサルデザインが重要視されていますが、行き過ぎることで問題が出たり、それぞれの子どもに合ったものでなければなりません。学習の規律が必要ないわけではないが、学級ごとにそれぞれの子どもの実態に

合うように行つていけばいいのではなから、学校は子どもを育てる場だという視点で考えていく必要がある、などと話されました。

教育全国署名については、各支部での取り組み状況が公流され、遠軽・紋別支部からは、高教組と合同のスタート集会や新婦人も含めた街頭署名の取り組み。北見支部からは、高教組と合同のスタート集会、民商祭りなどの街頭署名。網走支部からは、部活などで土日は厳しいが、各職場での取り組みや気象台の組合や元組合員へお願いしていることが出されました。今後十二月三日の最終集約日、一〇〇〇筆の目標達成に向けて、各支部で確認しながら取り組んで行くことが大切です。

組織拡大に関わり、何かあったときに守つてもらえたり、文句を言えたり、異議申し立てなど交渉の窓口になつてもらえるというところが今後のメリットとなるのではという意見が出されました。今後のその人の生活にも変えかねない責任が生じるのに、誰にでも組合加入を呼びかけていいんだらうか、という疑問も投げかけられました。基本は誰が入ってもいいのではないかと、そして、加入者自身に何らかの心配がある場合でも、加入してから力を付けていくこともあるので、組合員の実践を見せていったり、つながりを作つていったりしながら、網走教組の考え方を知つてもらい共感を広げて行くことが大切だと話されました。

組合費についても話し合われました。新採用者などには組合費の高さが壁になることもあるので、支出を節約し組合費を軽減できないだろうか。子育て世代は支出が大きくなり家計が大変だが、組合費は高くなつている。もともと道教組の売りは組合費が安いことだった。これらの意見を受け、今後の組合費の軽減について定期大会に向けて検討していくことになりました。

主任手当の使い方についても、論議になり、熊本地震での救援カンパに続き、台風被害への救援カンパに主任手当を利用することについては了承されました。ただ、主任手当を

利用することについては了承されました。ただ、主任手当を災害カンパに使用し続けられ、いつか底をついてしまい、今後の子どもセンターへの拠出などできなくなつてしまうという意見が出され、北海道など地域の限定、一定の金額、一定の視点を持つて使うなど、何かのラインを定期大会で提起していくことになりました。

## 学力向上体制を 更に越える教育実践を！

オホーツクの小中高の教師が一堂に集い、日頃の実践を交流しあうオホーツク合研が十月十五日(土)に行われました。講演は埼玉県立川口北高校の小池由美子先生でした。自身の実践を交えながら、生徒が主体の学びについて話されました。その中で、「学力」向上路線に対抗するためには、反対か賛成かの二項対立ではなく、その意図を飲み込み、乗り越える学校づくり・授業実践をしていくことが大切だと話されました。これまで網走教組で議論してきた「子どもたちにつけたい本当の学力」やまなびバで培つてきた学校づくりや授業実践の方向性は、これからの私たちが歩むべき確かな道であることを改めて感じました。

オホーツク合研に参加して

子どもの様子と学級づくり・生活指導

北見西小 勝田 統人

分科会は、小・中・高の教員が各2名という構成で、いろいろな角度からバランスの良い話し合いになりました。子どもたちの集中力不足、創造性の欠如、コミュニケーション障害といったマイナスマスの実際から、その原因について探りました。ネットの問題、家庭環境、学校教育等、様々な要因が考えられる中、教師はその1つ1つにしっかりと向き合う必要があるということを感じました。しかし、今の時代、本務に上乗せされる諸問題が多過ぎるのも現実です。体調面、メンタル面共に自分の体を守ることも、教師の必要な務めだと実感しました。

